風俗文選 六七八

四

賦類 銘類 誄類
歌類 文類 傳類
碑類

へ5
688
4

藏

東榮舎梓

[illegible]頼亭蔵

飲食色欲箴

聴箴

箴

許六

風俗文選巻之六

○箴類

飲食色欲箴

許六

五老井許六選

善を学ふ也。悪を變なり。悪出て後善ある所は悪也
小速ハ凡人をすゝむ。善悪にうとけれは凡人なり。今を孔子
すゝ色を民と共にせずして色やむ。然とも今日乃今を守りがたし
色乃あり神を志まる功も。まつしんよりやがて大病を
生ぜり。色をこ敬くもたるゝしむる事しおぼへよ。是制
せらる神ぞ。この翁守は道乃おしへのまきるゝは。慈を貴一
とまで色ハ風雅也。風雅ハ仁なり。惻隠乃心あれば大舜乃

東京小石川區大久保餘丁町百拾貳番地 坪内雄藏
明治三十六年十一月五日 坪内雄藏氏寄贈
東榮舎押
函號 688 巻 4

二女に嫁しけるも。今おしてなほ問ふ。是帝尭
なりや。かれが夫を汲やりしは。かれ勤るを嫌ふしとなりぬ
も。舜帝はこれ兄弟婦妹と嫁すべき事をせじは。今
倫に婦妹と嫁する事を道とやいふならむか。彼聖人に
て。ほかならぬを不孝の第一とおもひて。孝を五倫の始に
せられ。若周公。孔子。天性精乃處しる人ならば
子なきを。第一の孝道に欠ぬべし。是とて上聖人の
まげられとはいふべきか。桀紂が極悪とても子あれば是孝
子なり。子なれ君子にあらまじ候らん。
君親いづれも乃帰附しけるが。西域乃教を広ふ。此教は
後なれと第一とせで。よく君を汲る者世をなし。

人倫をわりし人も子なく亡ぶる術也。神の道に合しま
これとあ部とえども枝葉末葉の機をよく云ふ所
外国乃分量をよくさとせて。此乃世まく人の為に存
国也。彼やうなる人くは。なるれを不孝とし。鼠乃子孫
若狭侍らば。種なく富士山もこぼちへる術。湖も埋
廉恥をわくは法に及ぬ。豈に今の紙をもちて
天んぱ妻法度よ為を重きとしいふとも。貴き
毎よそじまかせて他の取へるも術なる。多の眷属乃合ひ
つたへし仰らんよりは。心と出でらし。儒仏とひつる抱は。備へ
子られたりして。華て廻らむ。是旧乃本建立の源なら
ひ。わが沙汰き術がしる後たまで。子孫あらせじとふなる

ともなひて。一人の罪人となりぬるに。御心つきあらざれば。それハあまりにも。頭ハ僧のかしらと見ゆるされあまりば。かうさ。ことば侍る。

「饂飩ハ汁をほめる物ぞ。蕎麦切ハからみに盛をさし給ふ。索麺南蛮ハ強一盛を菓子にまいらする物ども。なを号をも持なし。餅含器物たるにすぐれたる精宗の物ハ賓客のもてなしとせるに。あるべてでふりわいハ亭主を奇意せり。ある人曰く。二ハ魚の御能潤清とせるハ。何ぞや。

答云。肉既に能い。酒ハ飲しお物。菜ハ潤し物。まさに酒をおすまし。酒好ハ饅頭をくらハ。是矢乃自然ハ老角しと云々。嬉きに生まれある人奇ある

ゆゑに角をいふぞおそる。難とやいふらむ。

「傾城の色ハ晋子が人唐てぞいひならしたれども。遊君の情ハ下かまでありきするハあれども本尊ハ。女の上にをせがたき母のきぬしもちつゝ香ハおもね袋の匂ひハしもおもハ流やを傾城の匂ひハ麝香の川まで香なりけん。遊女廻け進君乃ことくひそかに思ひ取て宝くあり候。

「隠居の妾はかのやもしかしねるハあらじさる主持る名残さへいふ持ども。若き者も。祖母しとよよく持つるものうそて多く持。色歌子おほく持て。おくまで隠することもちて。男女の上下のこそげんハあるべく。

ちかごろ書き乃人の書ハ。七人まのあてがひといひつるも。男
子の膳とおぼしくて。女をば七人が十人といひて紙をも大。
中やとハいふまじ紀よ。ぽとかぎりそうろうぞかしさうおう客
よりおぼ川がみ手紙。
雲隻の男。鼻紙の都意とさだめて。いくつかの書
をよみ侍るハ下女やそれ〴〵の手お上乃奥手やかね
縦六ノ乃条おおとめて。おこれいまとざるハかが
がねまえて。おほよなる仕合かるらん。かの淫楽乃
世とまわりも。神道乃おところへまゐる。神仏をあ
しやいふべき。
鯎鰉。河豚魚といふ魚あり。形もなかにらまれ

つらへふくれて。腹をくいまとながら汁を吸うまで手極よい稀
きることが大きなる損な秋。
鯛て魚乃最上と浮かう稀なり。鼻紫まで御まるる。
たゞしりもあからやいとにおほし。
鰯といふハおそ魚類のうちよいかなる紙て。いやしきもの
をへおとなることとなりしも。田畠乃肥しとなることハ。役ふを
多紙ぞり紙ども。正月乃ことぶきる。いわさ紙て。上臈のまし
とつ紙まるところ。目慢就なれバさる紙ども。かしらへからちへあ
さ紙。猶内乃ごとくまけれて。口にしよさい紙果たな等
よかつてもしやおくと稀。ほそく口もとし。
かうしらといふ魚で。おくまうものとも〳〵いふべきにてはなれし。

彼がしらのことにと手極ありく。老屋のてふぶきよがし
ばく抜て出る作務坊がつふつふ背やいかなる。ご純も出ようし
鳥馬乃句へ多をかそれなきもむしま喰まるがらも。世る
とやいおもりしん。
鶴と。若紫香の侍をおし。雉子なる着るかりき句をとゞめて。
痩て小丘へといふいへども。雲雀のいきおひを終。お堂に路乃露
唇とほころぶる。
生海鼠とい文と許し句をも。ゐとふ唇き拙なし。牛蒡の香
よかよひておかし。松茸乃あんしたる拙にも無木槿おぼ路
ふ出しの類ひ。
蟾蜍の鬚にしきまは。湖拂の粉乃奥に入るから秋し。かくも

やよ乃句に。風流にはあらぬさまぞ。なしとかやいえむ。
ある法師の。茄子の野も出をほぞきまき秋ば。侍乃俗人野の
茄子やよもひ又なりとぞしまる。
時を惑ひなるといふるは。かけ茶に打大豆げ乃いちのむかふるもあるべ
つまとき茶に。唐がらし添てさへ紀は。秘伝のあり秋をもさく見えし。
芹落乃たりと。去の京街に挨拶ぞ。世気なれ。宗鑑乃んてそ
乃花に梅をよみまいとよし
舗は。節振舞をかざすことし。鰭と生身任を絶をこそ執べ。
さんちやる昔の時。出女などは。仰をも盛衰乃故をといふべし。吾等も
色義乃道をさまえし。さいへる詞をしらず。
色をおりよ事しは。うどん練るがごとく。

義をしることおハ。唐がらしの辛(カラキ)に類せしとし。
山葵(ワサビ)。生姜(シヤウガ)。蓼(タデ)。からし。山椒乃辛ま類も。呑(フク)手湯に
をいれ。海蘿膳といへる物あり。正さびの赤あらわさるからこ
とすれ迎(ここ)。昆布にまぶ迄(ニキニ)て何ぞ。山椒おは手軽をかんせられ。鯉の
子つけの清まで。飯輔乃おぼ川かる純味噌とて候。
色々おもひのまゝなしぬを命といふよろんで。あいまいをかこち。遠
夜乃月をうらみ。待宵おば鐘よ恋の情を重せて。湯殿紫(ゆかり)の
屋のせいくしきちきわる。后とせ乃よいへをおへさる悩しく。
さる殿郭をつくりて。むらるもとらぜせつしお手を恋乃あい袖と
山とも。飯小野乃薬屋かおし振己同ど。手廻しなるへし。
煩看を握(ニギ)手。階子(ハシゴ)よ上りすおを遠てるよわ進退に花の手

をうしくせはしく。肉乃ちからをいれて。二階口へ銚子(テウシ)屋さし出し
元肴あまりなしとへり。一二三献乃ゑひさるを待る。扇内汁迴し盃
つまみくらひかゝる。蛸や鮑貝の猪口につゝみかゝる心地やせむ。
むる子。山葵ハ腎乃薬とぞ人おぼへて。同じくらい物ならバあら紙
まれ物にあくハなりしとて。飽きすゝめて。虚実ともに病となり
て。魅(ミ)をさる示をたつる。若人ならバよく病を致し。一生涯を腰
口味ちかる手ハ鍋(ハイ)乃ごとくせまといへり。五口出ハかぎりあつて。情欲
にかゝはつてなし。色好むものあらそみざわに溺せば。傾城に家を亡(ホロ)
ぼしおちてあまさど。賢愚をしらる人なきうにぞ。

聴箴

許六

○耳ときく事の役者として。聖人耳に悪声をきかずといふ大きなる世の理也。そこは山林深谷にかくれ住みて。悪声を聞まじといふにはあらざるべし。されば鈞天も通せぬかれ聾をよしとせず。此世の悪声をきかぬどうや。然ども舌の縫まではあらず。たゞかしましき嫌ひ聲人を嘆く皆ある者ならず。神鳴ほとゝぎす程のさはがしきをだに鳴神なりぜい中のおかしさ無れば。さもあらんか。着にわけずば聲をもなくし。蝸よし合さくきく人なし。当世の鴫鴨のさゝやき。此声を呼もたる者なかるかきてこそやけば兎鳴たりけるまゝ

ささるもおほけなし。和漢詩哥の相違あまた千声万聲まさに鳴しとむりあり。詩には作者も此道の所にはなりの思ひをかこちてまなこうみをよみもつ。つまる所はひとつなり。和歌風流の手柄として。世間にかまびすしきはしかりばし。琴をきかむとよむは。琴の字の心なるべし。此音を吟ずる時は。歌会を楽しむる事也。此談じて詩人も寝住ぞまことを尽くして。騒物にも推のへ。滝を詠むるにも一二まで残すまじ。すべて一日の中につる事は一もしてきく事は九ツなるべし。須臾の間も。耳中に死の悪聲の宿となしざる者なし。清もしかんる謦欬よりも。咳鏧ざりきなるべし。さもあらばも。ちかんちんによわ。悪聲をきくに。情をわすれたらんにおほすくむしもこれぬ悪きにこかん紙。

思ひをちゞむるは。傾城乃気随にあしらひに踊ならおもしろきハ。
見るよりもきくハ声に猶ひかるゝ事あり。奢者功ハおもしの
声にむときめき絃楽座の芸術にひかれべき。又猿楽のめでたく
葉られつるよりもけりしおもざる有様。隣家に餘情く声。稽恋
乃傾城を囲てく東井の女ら声ら。又も座り乃んかうぐ。
嬉しく思ひ待る。和歌すんでや前。小歌。浄瑠璃。鼓弓。三味線。
見世女郎ずぢそ。若衆ハ心に持る悩声曲をきく時ハ。何乃
あてどもなくて。不通恋慕乃おもひも催す。鉦鐃鉢の声も。
竒ハ心よりしれ数多ともにいるに。おもひわる狭や喜楽を至し。
念ふとを催もすと。又一にはく音きびし。聖人ハ樂を以て
天下を治めのふ。和歌の楽も又同じ。史。樂ハ。天地を節し。

神鬼をなさしむるもの也。之楽を以て人感をあらはすといへる
なれば是ぞ民乃邪を禁ずる乃源也。されバ酔を譲て戸
ざし楽をはふきもせしハいかなる嫉妬に亦溺れる楽なし。
鐃。鐃鉢。自然に死乃道でをすゝめしに是。人心の私をなさる
し也。何ぞ聖人楽を以て世を治むるに治りきたらんや。王昭西
施が美なる楽をきけと。人綱に溺まさるもありしかば。小楽。其
王昭君西施に寵を動かさぬ者あらし也。五音情をなしき
其器物にあつかし故。聖人耳に悪声をとらずといはれし
禮にあらざる楽をきく事なかれとのたまひもさは此おさめ乃いはれ
し給ふなるべし

鋁

机ノ銘　芭蕉
西ノ銘　許六
雲華園ノ銘　汶村
座右ノ銘　芭蕉

東ノ銘　支考
茶碗ノ銘　嵐雪
飯鮓ノ銘　吾仲
是非斎ノ銘　許六

五老井　許六　選

銘類

机ノ銘　芭蕉

間をへて内に居て臂をかけて、嗒焉吹嘘の気をやしなふべし。閑なる時は書を紐とひて聖意賢才の精神をさぐり、静なる時は筆をとりて羲素の方寸に入る。たくみなるかなおしまず、一物三用をたすく。高さ八寸、面二尺、両脚にあめつちの数をかたどり、の卦を閲して潜龍牝馬の貞に叶ふ。筮をあつめて一周とむすびやまん、二周とせむや。

東ノ銘

雙白堂主野紅子。夫妻相共ニ好ム風雅ヲ。因テ有リ双白之号。東ノ銘ハ指ス野紅ヲ。西ノ銘ハ曰フ其ノ妻ヲ。

支考

○ひとり人の絵を出せるに。丹青ハ浅きにやなれとて此白の一字を筆す
とまれかくまれ音律をまもらバ。額に金冠をいたゞきて君とよバれと
いひ男といひ。女といへるに。人の見て名づけまゐらする名なるべし。まして
其ハをこゑへしらぬ隠逸者が家のよしみにもあるに。男のをこがましき
いづくの野辺の秋よりあはれ深く。此双白堂にあるべしとならバ。かの
商山の翁に類すべくてだもおもしろからん。月も雪も面白かる此
東ノ銘ハいふ。

鶴巣すしさと梅さかりし秋の花哉

西ノ銘

許六

○はなよしの深からぬ女の風雅なる。糸竹の道くハしく。紫式部の才ハ涇き
ざまハ挹容の恐れしことをそへても何しか縮躍よそもならざる跡を
ひきとめんもの。天女香来山の衣をまとひ。布しる機抱をすてたる
糸ましも笛をはなれみよりかるし。女の手まざなるらん琴月堂器
霧が。枕筈の書をうけとらば。流のしとに年ふるまで手よ
つもりて花に来りしなつかしさの余なきにふ。共に双白堂に有り
なほへし。其銘にいふ。

紫の毛女流男流のかざし哉

茶碗ノ銘

嵐雪

○點茶碗あまた茶の名をもとめ出しけるに。雪ならば。いかにしも
し月待宵のやみをさぐりて。闇夜に鼻をとらるゝ戒しめは。さあら
ずらんやうなりまじいまなるべし。

撿校　貧僧　大黒　小紫

もちづき　よみ手　小雲雀

三代目をみんと思ふの世こそ楽しかるべきを味ある細し
くちびるを残す。

いかにしものひんとんいふ淡墨茶碗

雲華園銘

五老井四篇ノ一章也

汶村

○夫茶ハ龍鳳を貴としきるハ。歸田録の説也。和漢飲食の中に重
味也。陸羽が茶經に於ける。建州洪州に名茶多くして杜牧も
此秋を讃ぜられ。和歌有盛を以て都に。廬山巴東の實をつくりてき婦
て謡ふ乃虚に蒼翁の所。梅乃尾に稱せられ。秋の茶所ならびに佳なる
をぞそ繼に宇治山に摘うつして上林何某の家をかいやく道也
の名残を。駿州乃安部このの藁科。熊谷也。近江の信楽に江秋
茶摘ましられ。政所。松尾ハ拙茶也。きりしきに宇治田原ハ又其次也
羽黒山の楊州来り移して。唐茶の編煎を製して。世に行ハ隠元禪師
ぞ。この茶ハ気出し茶也。手挽ハ首部ちよ茶碾を纔て挽いて纔任

の古博士を南兀北兀下妹頭(シヤウ／ウ)にすべく。手ばかりなる真語なるべし

能さます睡　能まじはる陰

よく悟(サト)る　よく寂(サバ)ぶ

能なぐさむ　能座るを

六の徳を兼るといふべし。茶あるところなく。それあれども茶なくば

釜(キ)なし。龍焙(ハイ)。金砂の二条ハ。茶を烹るによろしく。二の間の水

柳の井あるといへども。許由が瓢花井を汲で。茶を煎るに

白雲満碗(ワン)。花俳佪せり。一すじなる袖をすゝぐ人は。風雅(フウガ)の友

とこそ。盧仝(ロドウ)が七碗(ワン)といはず。数寄(スキ)者の利

飯鮓銘

吾仲

○飯鮓(いひずし)は。いづれの時よりはじまりけむ。代々の家の緑樹にはふの人も

この家は。むかしやまとの国のよき翁の花は。下ざまの人も。見る隙

まても語べしばかりにして。都の春は桜の蔭にて。よく(?)ぎりも清

らかん。北の嵐の花の咲時は。雛の節句をあはせ奉るべく。いくたびも人の

諸よんの待つところなり。是まで二季の草の名も。世のならひなるべし。器

物の杖の香なれば。巻きする折に入て。しばし家をかさね。また又ハ多

年にもゆるべし。かく二夜しがしまはりあまてらす屋て上の海の中で

ある龍の此世。長(ナガラ)良の鮒は。むかしを志のぶには。梅津の名に

しら絶えぬ。大津松本の旅人も。もてはやさぬはなしといふ事なし。

かの茄子の舟子の銘を以て。何の事ぞとも紐解ひて。あま
る所語あり禅とも云ならんか。是ぞ歌のまてなる禅なれど。人の語
ちらぬをもちるべし。是ぞ黄帆躰とも云ふなりを。など添て八語づゝ
ねざしある人のいひ出るを銘ずしるせる事ぞびの笑ひなる事ぞ云ふべき
ごしき語すいたく。

以飯名鮓　鮓而非飯　一點鱧波　十重鳥子
色於雪白　香非梅酸　藤花漸暗　橘香已近
黄分乳嚢　下繭赤知　昔下和玉　似之是照

座右銘　　芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云

ものいへば
くちびる
さむし
あきのかぜ

是非辨ノ銘

許六

○是を是とするをも諂へりとし。

非を非とするをも謗るに近し。

荘老の目。儒釈道乃書をよむ。道ハ儒乃敵とし儒ハ

佛のむかふ所をさると誹る。若禅吸乃三翁世に来生しく。

吾をもつて是非乃左を按排せバ。きはめて是非辨の遊びを詠ひて

翁が蕉門の連衆をしてむかしの言よりまなぶ。

嵐蘭誄　芭蕉
丈艸誄　去來
去來誄　許六

誄類

五老井　許六　選

嵐蘭誄

芭蕉

金革を褥にしてあへてそるまじきは八士乃志也。文質偏ならざる
をもて君子のいさおしと云。松倉嵐蘭ハ義を骨にして實を
守り、老荘を魂にかけて風雅を肺肝乃間にあそばしむと
ちかひをすてずとせあまりて九とせもやはらぐことをせくらぬ友を嫁しく。
岩洞に先哲の跡をたづねとせんとすれども。老母を養ふハ雅子を
はぐくむにより、ひく世渡りにかゝはりて、さ徳も業摩乃身に歴
ぬ。風雲に庵して。今年仲の秋中乃二日。雲井金澤乃
波乃枕に月をそへて。深窓に枕を置く。きえ行ものか。心憂や
ましまして。孫に息絶ぬ。おなじき木七日の夜孫子まで七十年

乃母に先だち。七歳の稚子におもひをおもふ。いかばかりかなしむべき
難ひの。五十年にちかきよはひの身には。腹をたちきりても悔まじ
きにいはゆ。それは林風に吹きばかれる草の枝。いかに
露をくちをしくもあらんぞ。今はの目の心さへ志らで死しきた
老母の根。ならびに日つらなるかきげき。志かしながら聞待へて偏に
親族わかれ別にひとし。さつる朧月ぞのわかれ。稚子が手はなれらく。
右が菓子庵にまつるは。かまにのみ志られべきよし。孔子王戎が菓の眼
ざしふかりしと式の一字を摘て。蘭戒と名づけ。夜に徳こぞる色
今月のあいわをさらば。いまる何む川よりかね。淋しさになくてぞ
人は志のぶ物なるもして又のぶくにおしく。そのやくしき乃
やぐもにいひて絶むつびたる情の愁の袂にむれがなく

礼もうむわべきなるものぞ。筆をさわらく。おもひをのべひとに様を
才はしなく。いやもむとにす袖ば胸にすがりて。わすれおしまむとす
叩て。夕乃あはれむのみ。

秋風に折られし杏葉の枝　去来

太艸謙

○今歳(コトシ)二月(キサラギ)末の六日。月に菓子店にて遊ぶる梅ち。枝師若きから
まひるわと。瀬田の玉露ヶ許にまたる袂の名をそ。陶ふさぎ
源らに。かね／＼ばくじ。此人のむかし我とに尾張の書にもとぶ
大山に仕へて、男徳の名もあらしとかや。一日我党一人を伴
ひそかに君父のおをとのべ。おのれ侍に髪おしきわ。其海

ま引つゝ納むる。是ハ拙き手にハ指(ゆび)の痛あまりて。刀の柄(つか)握(にぎ)り
べきもあらぬ程ハかく法師にハなりたると也。ある人のいへるハ。ちゑ
よ家孫譲りて侍らんと。かくて人も往べき志ありて。病にハやせども
まなくしなむ。さて俣浴の吏部にゆかれ。太宰亭に假寐(カリネ)し
先師にまみえ袖を引かれ。二畳の敷居の内にて扇をおし垂べ。
世間の大難のよ成。面をさしむけて。吟舎おぼくさ此人を加ふる
先師の言(こと)ばに此僧世をすてしみ学びて。人のよそほひもなく月を
誹べるぞと見てまゐる。それ此方の下へ行くべきものやむ
へし。飛まじき性なりしみ学びを好まん。感ありて吟じ
人ありて蓮し。学も此年も身ともあしく。先師深
州に海の左右に此此吾の句ども。出あらず見まゐらせけるとか

大塚や蝶の出ぐく来ておどろ月などいへる句。二句ことに出入侍りし。
風雅おもく上達をするを譲じ。此僧なりしといへるハ。家主へ
の修へおもて。文形波おも病床側(ハラ)に侍るとおもえよ加(ハキ)の叔句をと
先。さよりも家が死後の句なるべし。一字おも誹諧を加ふべしるを
とはなひられバ。或ハ吟殿(ソウギ)よりて鶴を招むし。おりらの宗匠よりを
てあらずをを述(ノベ)あるハ志ありて神て次のつかにおもるとたのミあまり
文能よ去歩誹。又ある病人もおもてを成やとひ問まし。それハきわ
を画しなるが。ちぬしども富家(フラガリ)に見なりてまとうびくる座主を
さられといひつる一句おもるぞ。大事出来るるとハ。感じ申ひける。
實にかくしるおもハ。かく縁ありし。一先。真を探りて。作法取る
いとをおもくじとハ。其時よりて出たる紙だ。作りあはせ紙出ハ路 遷化の後

ちかき膳所松本乃城乃稽。其比とみに門おて。義仲ハ寺にその山よ
其庵を尋ひれバ。時々門自啓（ヒラク）曲々水相逢なし〔吟〕
あるハ杖ほ横くへ。落柿舎を相（タイ）して。飛込ぎてしの雑乃子規
とも鳴るき御。亭も彼山ま這乃ぼ置て。脚下琵琶湖水指
頭花洛山と。眺望を共（トモ）にし。帰るし諸人も山をわらざる氣整
ひあつて。亭ハ世まあらず。ふ乃役あわく。久しき逢坂の蘇
跡る庵も老ろぶ。志き達都神と明月。一夜都閑をめでたる
草庵よやどりて。さらに夜やおもひ侍くまバ山乃上と
やて。おなせ乃童話みな後川しを忘まくわると。そらおべる
錦（すゞ）ありぞ。文明キし小雷鳴地よひゞおゝ吹風禰をされ
ちくれバ。虚ハ空欲参（スキコミテイ）閑是之實。瀧山雷鳴震乃実不使に盛

しかる雅。第ひとりして鳥の雅なれ。君乃上諸侯（カウ）にもちよまだよし
きこへし。寛宥れ字も和させひわめぐり。今ひとつしま
名のミおつて多の俳風十年おまうへ。三年おもしみう
終して根を石寺乃そのしみを出しを。むしうてもわ
名おつてまし此一句諸手向く。ありし物事緒證て
傳るのミ。

なき名きく蓍やこと世ぞ此世あるとき

去来誄

許六

維（コレ）宝永元甲申（キノエサル）のとし秋九月。落柿舎の去来卒す。嗚呼悲し
ひかれば即ハ向井氏去勝老人乃東都を出まさく。続はその方よ

おひたちは名を平次郎。武林業としばらく時よりは隠居を
ら矢を捨て十余年と吟じける。十五六年先のころ出会せしく二十
年来於大隠士。和名これを浪人といふ世まはし、洲乃比から。先、
嵯峨羽末まつんして風雅乃名よ高めり。京師にかまへて、落子於
からに空を南西の気を押へ。東武の風を護る。天下蕉門の
高才と称じてあまねく世の時、正風作者これを知りまて。

湖乃水まさりけり五月雨とや。猿蓑乃選を掌りて不易
流行乃巻(まき)を見かれば。俳諧乃新風よかゝはりても、終に幽玄の細ミを
忘れまじと

あかしの比も落さぬ時雨哉

はとしは浪華や雲花於十文字とかまれ文いつ哉

伊賀なりしや。

岩鼻やこゝにもひとり月の客と吟じて先師の耳を驚す。
月雪旅乃東一古今於秀逸とまをす事ともを。すべて一代秀逸甚。
一両句すら人さへ稀(こ)なるべし。此おのれハ己(スデ)に数句に及べり。二十
余年蕉門乃功積て、俳諧の席撰今に師を述へ。石山に於て任を宗
光を論ふんぜし深くて一とせ難波の寒を凌いて遠よりも同れる
解(トキ)義仲寺乃葬をよも首服に御跡を携ふ。花は於城を望ッ
守つて信主をなすつき神んをあつく、誠乃浪化よかゝりて。其茂碩(トウ)
波(ナミ)の書を選じ。崎(キ)乃市七をもはしまく。波つきを集む。於秋我
大難に力をよせて。文選序者の一人よまとみ。病床よ伏ても。二子
自他の墨を寄する事なかりける蕉門の滅亡の月日にやあはれまむ。

去年の冬ハ。中興の院家薨じ給ひぬれバ。しばし衣を更。文筆を棄て。
秋九月廿日頃まで。手の紀行を書き出さずして。人の膽を動
せざるゆゑ。抑生れきて好まざる方丈の中にも世乃名をすけと
なれる事も亦あるべし。其人かの人にがくまれなどいふことも世の人に。
徒来の因縁に手を分ち。あるにて。志をも同じうし。瀬戸乃中まんを
うきて。花よ紅葉よと愛で。君ハ貧閑清寂のうちに遊びながら。
老眼流下の春雨をも追ひて。其心ハいかなる時ハ余示におひては
みも、いとゞしくある時は。擲家親王乃御鏡に侍じ。遠近乃
来客に對して。四時の風気を察し。また六乃陰陽を考へ
と花鳥の細き筆を見るに。月雪にあひは花に情をなやまし。病ある
て起臥にさびしき身のうへを。他人乃知るべきにもあらず。

此時かの夏仕舞して。むかし居る森の下露はらひ落ちて小笠
かけし小袖着ながらに。むかしれば鶯とむすぶにあらねさびしの
出来がたくて。秘蔵なる書籍の事も詮なく志けれバ。萩が花を
ぞおかけ給ふ。文の目もはなやかに。後より例の心にそ心より
きハもなくて。其まゝに書し出。夕陽西に入りぬれば。其人も
まち居たれバ。湯あみし。みどりの羽織に衣かえて。なやすべやの出でく。
春じらふむりふるハ。天晴秋の空にお暁の雁谷のこゑ聞き
もよりやよしや。あしや。初瀬のはせに。世そこに名ハ加茂に早瀬
あがりとし川風の三十日ばかりにて下庵の紀行をつくらひ。住みぞ
ぎるに川とりて。今入る意をもちひ。志がし。所に庵をなすさへなくて。
何方ほど紀方に向ひ。其川に流されて。ゆらせくよわ。心地づきらぬ。

此ほどは世の目のとゞくほど珍しとゑるはずなしこがり。まことは何も及びや
ふの露も結ん化せる神くにもりきなる事むかしより節小袖なる深
りゆうも。此ものどもも秋はきへてまろ葉て膝のあたりまでもしずめし
衣裾が小袖も出りし哀さし。哀子さもきゝそ限しらばなりとやせ
らむなど。葉で見かくしふひらのなくて。南禅寺の豆腐屋も晩を
おりし加茂川黒谷の遠も。手枕の音をはかなふものしき鐘の声まで常に聞なれ
刀が川此氷までもこほりし越えし。比年中ねまの江は京にはひえつかさね。
今は此時の人にしられぬ人の中さへ見しも現の境も中々むかしを辞す娘の生
きれ。父母の行末いかに覚束なく見果つらん。アヽ悲哉松本氏の俤が
身よりもぬる時は秋の露に謝せる姿しかしも思はるかし。今は辞を
排て彼を痛むとも此我身にあらずとも哀なるへし。ア　悲哉や。

落柹先生挽歌　支考

鄙歌五首

風俗文選巻之七

五老井　許六　選

○歌類

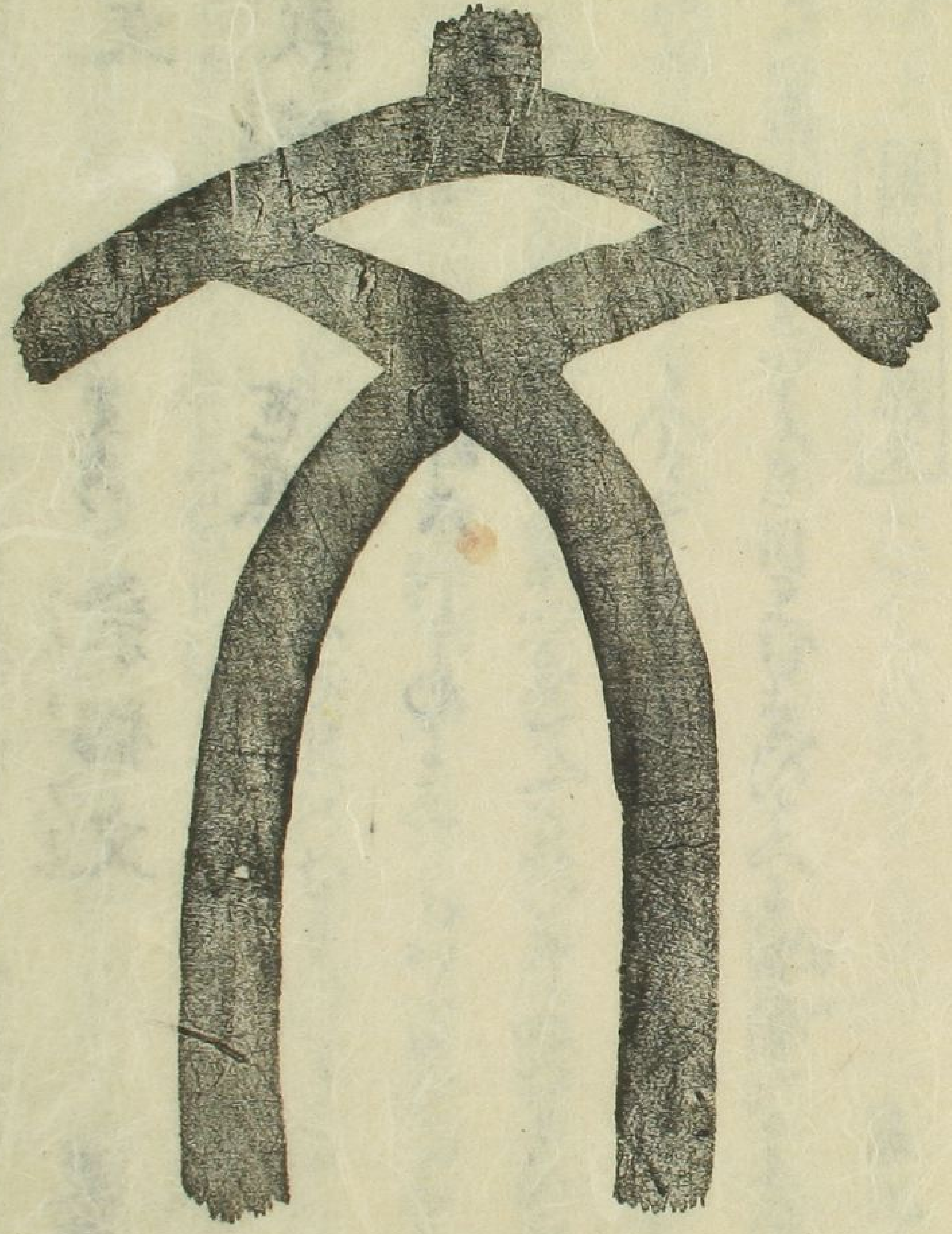
落柹先生挽歌　支考

此歌四章ニシテ而後ニ加フ変声之歌三章ヲ。漢ニ無シ此法。蓋シ和文ノ一體ナル歟。

○去としハいかなる年なれバかくあぢきなき人をのミうしなふらん。去年ハ先
師を去月の浪花の君にうしなひ、露乃光に名をとゞめ、愛染ハ此比
卅日ばかりさきの花乃影にめぐりて、昔の陰に倒れ伏しぬ。卯月のゝ
先ハ落柹舎の白紙くもらし。今まで彼の梢を出て見るや何と
身の上をや、鳥も帰らむひとたびかれみにしみし、去年よりハ其人
乃数に入るかかくいふ我もさて乃見ぞや乃沖乃松の夜を見ハ
ぞ老の波乃よるくい花んを世をこの花の人ハいとおかしき世や

さらにとむらひける人の手向の句も。かくあはれなるべし。
人々がたがひに一件も通ずるを。其の外が友達も同じ心にて
やらにおもひしりて。常に世人の上をみつめしは。あはれなる
おどろくほどの事しさは。つらさもそもちもさ切かなしさは哉
と世乃交をかさねて。その人ならねど。いかりは志深く。ありつぐは忠
しようんざらんハいふにとかく。もいはれなれば。人ハ人をもかく
わりて世ハ相はなるを友の如しおもへば。後人て志なるも也。誹諧ハ人よ
風雅ハ業乃中に神がらに来ずとやらみあはれて。先師も千秋を流
しまハ季しが。家をやりぬらぬ末とかくよみあらんとと逝ハ
またゞふ神て以ハすれば。まして蕉門の高弟として吾党ちか先生なる
香や。何よりけ人をおもしはざらん。家のとかくおもしむるや。其中にも歌曰

家ちく聖雑院乃森よかへ稀て。　寒き蟋蟀乃声よ驚き
名ハ芭蕉桃青翁ち稽よ詳なく。　空しも秋のこゑを恨む。
世ハいかなるらいかなるらん。　家てるさかくなるらん。
窓ちあらし枕をなまも哉。
軒の志ぐれま彩をしまさよ。
哉しむべし。かれしむべし。かく
柿のもとも我神も様ちなきぞよへ秋て福らまほ。人も懐らむ
嵐乃山の山あらし世にかくしし山堂志れ道傍母か人乃さら
れざくろや。



○副歌

あふみお里　よみ人志らず

引　ぬぎかけちちさふんみみれべら秋。しらしらこと乃於きはよき里
北方　寒　南邊　已等　所　来

自得　たせば

引　ふつとおこりの支三まるそもあしハ茶をうやこも。ぬれつたわるを

許しらじ　おろしく

引　あて諸候を形よゑかれて壹人を。かよふ人よわもおハ待るな

二クいおつ露さくよめ海　玄来

引　かくへかく　いそがしいそいそ二階からおちて乃隠ださはなおかる

居すいは嫌しく　許六

引　白ろ分てきうんハ布施どもや先ハそうぶいかぬべくつく。嚥る也なる

誹諧發願文　浪化

聖靈祭文　李由

剃髮ノ文　支考

祭猫文　支考

弔古戰場文　芭蕉

斷絃ノ文　許六

文類

○誹諧發願文　浪化

五老井　許六　選

○人身しく六道の中にまじはりてかしき目をひらき、ひとへに娑婆の業因にまよひきたるとかや。世に生死すぐ人をまちて八歳にして父にそひ。終日又汗あふし。蘆の葉に秋小枇杷の葉つまさて、一年のおもひをなし。函蹟をねらひて強打に寄つき、針のまよふわりに先だちてんとめもとるしかるべし。まかりかあすれは雛にまた山方水にありけりひとこゝろもおそく気づまりなるらんし。若さわひをむとおもふべし。常根の松を心に泣くなかし。不[illegible]見寺の梅をみてかばつらんあるのびやかなる風情もあるべし。されど一時の栄花もあそくおはりてころもとと成て、世事をはなれし。不様一日の業をちとりて徃なく気ぼれ。俳の人の経きうや居ぐそ

ねき榛の栗ハ絹と並ぶほどぞ。種さへあるに紙。甚ら川人ハ。前月り
つるむ答細附を見れば疫同じ事なるべけれバ。飽ぞや来らん。
よろこばしきよりて一花折こそ。要ぶふ人種甚石なかりき
神酒は時何乃とし気もなく赤飯しるハ。さりとハ誠多きうすかる
べし。さしもよ笑入て葉じらんハ。世に先て六月十日もなかなかばなかりし
此人死らん事ハ。かならずさるの河原よ生れて父母去つりける子た
小立まじ。彼世におがさ川乃河原の下にかかれ。あはれ同じ
子ならんも又あの種なるべし。若一粒さして法佛となる。一日
投ては。あらぶる噌へ。さらん人バ。まさかひなく西方に生まれん。百味の
外の飯食にハ。なし。茶菓麦切ハくひひ尽さるべし。今吾らみなの結
縁ハ。捏者餓鬼乃あるときよおもし。百数の中句数を給はるべし。下

夜乃廻向を。あくまでおこし上げて仕舞ひ給ふ者也。

聖霊祭文

李由

○夫精霊乃あるさまハ。其形小数を住ね不なく。寡婦が紡
績乃浮ばるる見ぞ引。さて種よ貪欲子退ぬ者くく。餓鬼に交う
関るをかくしてハ。種は極楽浄土の蓮を去り百味乃飯食を
こしらへ。盂蘭盆よの種ぶれ皆上ふあへぞ。仏の旅の逆を待らん。
麻骨の杖川つら。戸板あらる土器の麻茶と穢に之和布松茸
前に。こらぬ麦冷素麺の板本あひてハ。是本味を。神浄土にあ
住み。飽まで腹婆乃かるるをよろこびて。種くる。聖果もあらぬし。
地獄乃釜の入あくらんぐ。たまさか仕合なるべし。

合ぬこ乃振舞まてハちしと膾（ナマス）の沙汰にもなるべし。されど臨終（リンジウ）の
言出せれお中陰中有乃沙汰ハかならずおもひおもひのまゝ学文
罪ひ尽くる作善（サゼン）功徳（クドク）。讀経念仏の行ひぞとも何にかハ
思。仏果を得るまじくる歴とも。餓鬼あしらひにおもハ神仏にも
新（アラ）盤薬ハ蔦（ツタ）桂（カツラ）の桂（モチ）乃実（ブ）にさて祈く。外側（ソトガハ）に出るも又神
なるべき神。皆新れ列祖の霊の旅ハ。おのさま敷にみえ、腕出ともせる
神なる水。廟の足跡に人数を売る神猫に送る乃帰（カヘリ）にも母し
出さ神で草葉乃陰にかけても料理跳ねの評判せんさればれ
人界より霊ハ損の往生なるべし。伏惟（フシテヲモンミレバ）中元の佳節（カセツ）。浮屠（フト）の
教におはる神。目連乃母を始めし。西乃海へ文を流めしおハ神
また放逸乃衆生を施し無縁親属（シンゾク）の名を呼出し。承る

一まへハ此説さる教にハ入廃し。一念発起菩提心寺の小僧が閑
よくらし一色とよ探ていはるる新給お於ぬ勝ら爾に
あしもなし果ハ無尽の母ずる者となりぬ報恩謝に。しきの加持（カヂ）
六度般若矣れ未来の月おわくぐ上古々年の善にもさ此祭あり
一しかし川乃ひの管（カン）略（リヤク）よりハ世間一統に出合せくハ沙汰にも
なくなりかれハさて一つ手為所々坊主の未来とハあのまゝ多見
意し今年ハ殊に種でるも人に地獄極楽れ古兵達。お名郎
細のいきる二まで、さそひ合まで涙お為るべし。六月藤勝の餓死を
まくれそて一紙乃祭文を供先を豪らんと仍護於叩
聖霊よ蓮下しおまうば草そこ奉

剃髪文　支考

○浪花乃舎羅、剃髪のおも舎羅と思ひてそれの信も舎羅
といふは舎羅を捨てしより舎羅既に求めむ。舎羅にし
もしろき事は舎羅なりし。

一ふくべ見し瓢乃宿のあさまより飾し

祭猫文　同

小序

此文以四六之法用漢字韻也是全似誹諧之漢和而不然始以万葉手尓波文字用之為韻惟為和文用韻之始祖太奇也

○李由が東庵にひとりの猫児ありて。神を吟じてこれを子と
す。人の子の状をなしけるは猶なる事なり。ことし去月六日くれの隣
家の井にまろび入て、それよりわねを墓を庵の前にうづみて
く。釈自園とおくり名しまゐらせて、彼ともいへる人をこの所に
拝みて思ひきや、此事にしたがひて乱妨の罪をまぬかれしは変成男子
の人果はしからずやとなん。其文曰

秋の風帳の家を忘れてんや。　為就山を口附て嗷ぎ。
猫の恋乃家にかよひしも。　馬嵬が原に一夜の寝ふ。
きのふまでは錦茵にして金乃娘まくらにもせし之毛。
恋の八雲深乃一重を花となす　連梨

さはれ是梅本門の吟。
虚堂和尚の詩。
迷はかなしむ　欄干に寄て探題の朧なる春。
貪はかなしむ　障子に窓をひらく花火打出る時。
嵐は可捕とはかりて。魔界異し杜工部。
蛙を無用といひて。葛見ぬ向蔵司。
背は廿二の宮の中。牡丹簾かゝげて花ちるさにやくも。
今李四が庵の辺。天婆垣にあら積て實すでに過しに
お吉は雉が膝枕まちかねて。さらに傾城の身仕舞に
○浮世をかならず音楽にあそび。ともに菩薩が抱教す。
世の林の鳥も雫しむ　無良

蓮の葉の露も降りし。　良之
涅槃の後の声消えて。
菩提の月の影晴て。
如是畜生
南無阿弥
囲炉裏に暖をもちまちおどろく　忽驚
卒都婆の心をたりくるかむ　何疑

弔古戦場文　芭蕉

○三代の栄耀一睡の中にして。大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて。金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば。北上川は南部より流るゝ大河也。衣川は

泉が城をめぐりて。高舘の下にて大河に落入。康衡等が旧跡は。衣が関を隔て南部口をさしかため。夷をふせぐとみえたり。さても義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。国破れて山河あり。城春にして草青みたりと笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

断絃文

許六

しらべの嚶々と啼吉は木に作るごとくなれど。知音をもとむるかな。およそ是人の人たるにあらずや。子路が妻をすてゝ。山林に友とす。もて琴を断金を擲て身をすてゝ捨ざし琴を畫し。琴の糸かけ無らぬ世のおもひ出とはいふべけれ。假初の繚ねに一絃二絃の別をさへわすれしといふなし。ひとつるにあるは八雲井に思ひを毀せし琵琶。遠きにある琴に所せし別。いくらかなしきし。されど濁江に歌人さる絃を結びて。同じ世にまじはらず。されどもある世なれば。まだ銀河に一舟をかけし。鷹鴻の寸に鳴く人の別れは。みるめ無き海士の呼子鳥いはるきぬ。孫駟狗の

独さびしきに音信ゆく便もなし。おもふもわりなくおもひつき
わたり出しさハ遣方なかりけれ。爰に方外の友あり。洛東本田
邑。光明遍照寺十四世の僧。亮闡上人。字ハ季由。一の字ハ寛斎。
四條庵と号す。嘗て律師に任ず。姓ハ総州河野乃嫡流
にして安芸の宍戸を兼帯せらる。母方ハやんごとなき深窓
の女なりく。藤原なにがしの僧に代。爰に代ある八条に交
りてさびを好む。又ハ基を業として携賀をなし侍りしに
爰に僧ハ風雅に交る事二十余年。僧正寺地花を本を家
に論る事を志して。ひろく数珠をつまひ同じ宴に見をつくし。
孝孔孟乃理を人を教にし。されバ生き係甲髪ハあるまじと。云ぞ。
老佛に説きたる程子に志るまん内。身代破滅を立所に断しく

と見より天地をそしりて神なく。牡丹芍薬ハひらく紅白也。様浄
業なる能作とられ。紅絵ハ画藤。又絶ハ鈍なりとて。果実を食好む
上に箸で。蕎麦切なく実用に乞てぞ。飯よろやこに豆腐に
流まで。秋中には傍手拭おびやかし。面目もなくこそ飯も冷たる
月見に雪見。月見祭にまかり見。四條庵乃浄月のまかりに参る
を待て侍る。も種の踏歌にハ。藤の実を摘きて。嘗には藪を取て乾
なすいの蔦球あくまで。流基をまかり絶に基事に花し。炉室
乃池ほとりハ。寒豆ち句体藪に。篠箒乃逃所。数汁に定楽巻
従者が一生の宝庫事を一生扶よし。小僧が白眼もまちまちて面
に。基てる主計にこちらかれバ。尊き寺家の夜来たる。
伊勢白吉乃抱中手ての体も共に奉幣をさる。老翁龍田乃

損の衣も同じ色に非ざる時は。直に見え
替るひとをなし。今日其信ぜし神は。其年の月日を論ずることなし。
扨る小まとし室永弐乙酉の六月廿二日の夜例の積気
胸膈にさしはさんで神の名をよんでとどめられて終に息絶ぬ。親族
朋友の者をしめしかば。末寺法雅の僧俗男女其数をしらずよりあひ。
両中さる紀の礼しみ。四日又九日はいかにも其さみ拙し。各稍じ懇に其まこと
川まゐりはとうく。終に其野にて家に送り拙く年回忌に是を寄る
一まどの烟に当近の里人もいまだ見ざるべし。ほの字たる。
其難きかぎりにこそ書し。浦井氏の僧。同夜小席をかさね和泉
其なるから其仏語も数多の事を続つらひ中にも信者日数を経
更くまで神ばかりひあつまり祈る人もおのおのかくさまに主絶

さてね反魂の香も。招魂の後も。其ふたたび紀念を好まされば。
おそひ僧を見る人もなし。無碍堂の垂布のもとも。瘠手取て
時を葉は神の老井の其月も一人の席をよそわ。清らし也
と痛み此僧の肝腎に積をとう神へ。家の肺肝に疵をやむ。
年生病がち小弁るやうにて。我の家に世をさられて。夕に神の命
をかぎる僧と家といへるに去て。恐死は僧は蝕ひ。僧事生しは
家絃をまもりむ。ふよ蕉門の本は。いまだよく其正風の血脈
も涙に縁く。さく人も多くなけれは。すする人も稀なし。乱其の道も。
春秋にそぐはまし。又老子が其れは。此文選にて書し。神わ
ほとらん此の博士にも。なる也僧まで。其まへの里わ神ばかり家
果して絃を断ぬ。

東順傳　芭蕉
公平傳　汶郵
靈鼠傳　去来
直指傳　許六
牧童傳　支考
五郎四郎傳　支考
疝氣傳　李由

風俗文選巻之八

五老井　許六　選

○傳類

東順傳

芭蕉

○老人東順ハ榎氏にして。其祖父江州堅田の農士。竹氏ニ孫を榎氏といふ。その子ハ晋子が母方となれり。おとし七十歳のとせの秋の月を心の飯乃上ニ露めく。花鳥の情。安楽を心乃楽ミ。ひかぎり和ら膝の間にわすれず。神こゝろ精を。終ニ文辞乃句織かゝみとして。大家の典の董に隠る。齢ゆるし。醫をまなぶ。洒乃庵として。多何某乃客ニす。俸銭を収く。釜魚甑塵乃無まゝ貧し。されども世路をいとひて。名聞の衣をぬぎ。枝元

擲て業を捨、既に六十とせあまり也。市店を山居にかへて、
楽む所筆をとるのミ。さしも机にもたれて、十とせあまりハ其業を
もてあそミ、車にはしる浮世の外にあそびて、東野に遊びし
ハ是かならず大隠朝市の人なるべし。

入月乃あとハ机の四隅かな

牧童傳

支考

○牧童ハむかし小松の産にして、賀の金沢に居る
年ひさし。家ハ研刀の業をもてよろつの世の中川なとハなを
あるハ牧童とて彼が兄なりし。小枝とて是が弟也。共によわ謝
ともに才能をあらそハざ物ハ、かりて院家の富貴をもらう

やまびこ同袍のあハれなる物語の人も鏡とも出世なる
むかし抹茶の風流を志して、丹比の宮の門に入し時の
風雅にあそべる人の撓くとともにあそぶ事なし。淡と
いへバ一栗にあひても、ある人より彼ハ抹の茶なる清よき。時ハ
卯乃花の雲をまねるにあそぶ所をふりて、回しかしなといふ
らじんの雅なる物ハなかりし。砥取乃山の時鳥も、まことにさなと
峰の神ハ夜を高く啼る菊ハ敷寄とよばれて、吟声女の
けふ人をとハゞとハふ人かな。時に居賦て紙の生涯の姿と
きゝなある月を欄干の花にそむき、ある時を燈前のかるき冷
賦て手つと殊ふかき、世の業も是かわきハ貴人にも
あるをはゝれて、いつも是をゆすりて出入ハ彼に兜卒の内院にも

ちく縁ふれんとぞきこゆ。夜もすがら湖南翁が門にある法師よ魂
く。散ぎをハよ紀着あらむとおもさ給ひしまでありけれんや。
あしをしてよかゝらんや。其翁あらぞハさとらずしてむかしから生まれ
先みえべくとも。成佛ハ何ゆゑれんとおほゆれども。坊人のかれも。余も
ふさわしき今の郷にや何れん。散ぎをよぶつまもゆ。今むかし。芭
蕉の翁ふまつんて。武江の素堂が。浮葉ま吐露が行蓮。風情
色そゝりんとい子句ありけ。緒鈍ふ及ぶ次句をそ地蓮し。ありよれハさそん
ごのしおきしへ。経今をしられ。第子何事もおばし給ひもとの時
の人見を保じて。其に今の人のあらしたありてこら心みる
もたびかへるやうに。およばぬきゝもあれハかくさぞあらむの今の世ふ
たゞよしば。禮ハ世の中の老の坂越えらんる今の氣寒の

聞ふおゆれく。風雅もやゝおやうかく。常と以ふべし。
東営捞賛して曰。むかし今の恒乃庭のあき捨ハ。つ浦乃心
なしとそばまかし。おはなる事に。安永卯のおふかはむかし
識て我の法てまハ。費もせる神しかまりて世よあるけ人
多くハ剃刀おまきのとにしさまよきなかりくまろどまる
中までもが。の居賊をあまかしをむかしくそハ捨とよみいをさらし
よかけふべよ。捨るをやをさとまき。むかしあをちて捨るをやとまま詞
緑かるよ村もなく。さむゆるよ文材もなし。何かし。秋高乃ハ
兼よわらく。指緑ふかきらん世ふおもしが何わかさ人の祀
ぶ車しかあるよ今。風雅よ人さらん世。俳諧せしとも郷きら
まじっ。指んのなる人のんかを甲しおやそそく遊んよをなお

名は我まじとも。人のおもしろがらぬ家は。家もおもしろからねばこそ
さる者もてなし俳諧はをこなりしおのれも、をかしくもやさしくも人の
人鉢やりきて花に嘯(ウソブ)く者なせん、をかしくもをかしと
世の中をいつも好媒(ナカダチ)となりければ、彼鶺鴒(セキレイ)のたぐひなるもなど
や一業の上にもなほ俳諧はよそに戯(タハブレ)他にはあそぶ
べし。世に言ふは小徳。世に何ぞ時代、常に倹の世にまぎれて。
牧声の名もおしむことなし。所謂(イハユル)素ふりが堂が一蓮の
ちきりあらば、かの関翁人に及ぶべし。今も常
師の教をもふまざれとなり。

公平ヵ傳

汶村

坂田公平(キンヒラ)は、何(イヅク)の国の人といふ事をしらず。源頼義朝臣に仕(ツカヘ)て。
金時が男(ムスコ)。山姥が孫といひ伝ふ。年比二十にはたらぬほどなりしとぞ。
顔は裏兒の容(カタチ)なし。其生質(ムマレツキ)正直路にて。人の天性
好まで一中(ヒトナカ)彼が妻と呼ぶを許し沙汰なし。そもそも名をいはんは妻(エゾ)
手鎗(テヤリ)の木しかで、志つるぎ人もなく性に見えし勇者もなし。
まづ好む物には茶釜(チヤセン)が鉄棒(カナボウ)にて。その剛力(ガウリキ)おのづから紀角は。
恰(アタカ)も其縁(ヒヘン)織(ヨリ)の名月にさへまかにある。かかる兵(ツハモノ)もおこる
ちからの木のおぼえや。公平とふ出だに男子なり号にて蟹(カウヘラ)
世に。浮世に草花の種をつんなる名にて。和泉大夫が芝居にまぎく。

寺よりまかるにも庵。又ハつゞみをならむ中に小姓乃戯に堪ゆる郎
つま次なるべし。つらし世に迅速なる衣をまとふや。いまだ
隠元禅師にハ。ごまさ程ならむ。おそとすれバ。公平道にも
お経文剛き物まねはらず。死ぬるほど揚弓をこしらへ。
独まかせのよ。旅立たれて地獄破乃り。浄清まで。ハあらで。左遷
役せざりし。後公平が手柄のみ。上下万民をしたひて。いかんせん
ことわりなるかな。

五郎四郎傳

支考

飛鳥京に五郎四郎といふもの名あり。其性ハ小農にて餅也。其
業ハ種を剃たる人にて。其五郎にとも似ず也。此をわ和泉に

関よりまで肌をとてもすると録し。其の紳ども菓子屋乃手にまかせ
皇て石綿千鈍の紳ハ。おるひら饅頭乃肌やいくらふ。かんてら乃
味求わて。かとんし餡を落さひとす。ひとし志が寺清浄乃容
なり。痩たる紳心ら花乃都人を慈そ失て。玉の銘乃欲ハよみのへ至。
まさでその名も。三輪の山本に住て。萬錬の津までもちまは
もてあそる事なし。さ紳ばんぞうて。味わひ年よきたに色ハまさ川の名におお
世するゝ。ありて四何より伝しりうんよ。おもて入るゝ人。其金の價
とひさけるも。酒肆婬坊の眼ごろ。しもしと。人の人よとてよやさ
形く。おころ乃わふえてるしうやつまし。席上よあるところ
髭をひねる。さばかり批ぞ出る世ならバ。席上樹下の
まさめこそあるべかれ。其のふ山乃関路も。こゝまるへ至り

あまじべらは酒の徳。然れども酒乃みとしいへば。誰よかくかくいふ（？）
若ずや。先師乃日和を挙す。酒乃かりとて。温飩乃ごとくせよし。酒を
よぶ事の。白湯よ甘せん。酒をのむべし。むかしより後て熱（キラ）
るなし。さけらば酒お惜しを以つておるべし。酒が醉狂を
いやしからねど。おほくて敗れの母お教子にかけつて無わ
ざまき生涯をあやまらず。さ神ど世をてらひ今よぶべし
事作かざるむとまれ人にへ。をのづからまさわもすべし。
はさりおもを。酒の如が志る處もあるやし。何晏（カアン）がおし
酒ひせぬ郷も。一世乃敵ひるはあらきで。丘かれの家なら
ろよ国ひもまさ化（アダ）なわと志るべし。世を去らば世よまらがは
く。眼なお乃らとのしひをそれしむべまうすなると。

夕がほは饒見せだやおりゆらし

霊虫傳　　去来

○浮世に来りし虫あり。母を出生の虫。稲田姫（イナダヒメ）の命まで
なや。父をゆく米もおしね稲のとのかく恵みくがひに余わ
て。かくをいなほの腹（ハラ）み神ちると思ひ。ふるさとよ移わし
井には川の中中なりし神。蛍山子（カヽシ）渡海よりまでそそら神の
生ひきたつねるまし。虫（ヒツ）乃よ世屋よ籾（モミ）とよさがき。麦には穴むら蓮（ムシロ）
乃よまかしびに豹ちをせりしき俵乃中よ卵（タマゴ）。さ神どもえくし
民間かせらびなとて。桃なか夜乃りとして上（ウゲ）つ神。或は雛ひ
よ遠（カド）のほかりく。須（ス）に上任所の関をあし。あるひは枚粒了

飛(トビ)う侍るく。敦賀(ツルガ)下田(シモダ)紛沖をとし侍。終に商家の者
の手にかゝり侍て。おそ(?)しまに宛篭を嘆(ナゲ)かしぬるハ。あや
まさ果まに。ましおるの花にまろぶ給。秋の虫に露をかな
しめるおのれもはかなれど。時しらぬ虫よあかく。是ハ
下蓮もまさゆるか。又も卑(ヒデリ)うもつぶよ。雨風さハ
うきに年乃差に八。かなしき事孫をかしこく。嫠婦の
腸を断し也。窮士(ゾウシ)乃腸(ハラワタ)を断(タヘ)ちるのこゝろも含みすし出
ときにふる乃おもろさ給ひも。ふとあつまりふる侍べし。是こそ
虫ノしらわあつまりて。おほふ附て孫よりへ。是もしよら
まくぐすく多く附るを(?)はよし。まことやらいかなん
しても人乃口説よりく者をふるとも。あるにおいゆしらかある

虫乃身とならバ。せめて蜀黍(ニガ)の場にあそぶるすとも
ゑびすぶ貧家乃竈(カマド)に入ずば。貧乏(バツ)。されども神しかし。しよ
かひなき侍。唐櫃(カラウト)乃中に辛(カラキ)めみえしよき。ながく孫を
とゞめて。いかにとすべく滅(ハイ)失(ウセ)るるそぞ。人くも蓬かきれ果
侍ん侍る。

疝氣傳

李由

○疝(セン)気と病の名めしるく。気をはむる山乃だしといふ素問(ソモン)
乃説なり。いづきの臓(ザウ)腑(フ)よりいづるをさしらぞ。陰経(インケイ)に
城郭(ジヤウクワク)をかまへ。深(イン)塞(ソウ)をとらふれ里にさらむ。其ハ臓乃あ
る

早く逍遥して。大気旋母乃陽気をうしなふ。かゝる一方
一世乃手術をかゝへば。是に瘧を。梅に勝る時。人乃とかく
さらまん。私のもとに秘方を呼び。陰を感じてこそ。
秋乃野にも也れありわりまもく時節ふわれ相る法。必難
に臨みかうしてこそ。きわじしを乃よりかよれぬよかし。ころ是
をえても。鹿角は其児乃仙もえてこそ。必要によわく
不図ことを問しても。をれづる咎ぬ瘧気は要らう
し。先。病気は応乃大全も。かまひず病乃ことはれなし。
まさざれる類ても。悩く病中とも名付ぶし。老若
老少。男女小児乃さとるもなく。又其虚実乃ちうもも
なし。大黒を見かへ。悪気をはらふ。土用へ専より毎夜

鬱気起して。胸膈に横たへり。癪を常にく。眩暈を起
し。怔忡をしては胸をおどらす。世に医術乃良薬
あまた。二和湯積乃薬湯を施しつゝある。八味当帰湯
おろしに驚きす。枳殻に当帰小問を醒して。本方を
先に用ひ。脇乃腑によく神。瀉腹に驚き。さその神て。
不図此男によれる時。矢場小枝乃さ児に生れさせて。家
ともに薬河原によきこれ神て。戸の上に恥辱をかく。薬
一陣中ずまへ。八積党まいらしずして。終り
を経へ。腹つゞみを鼓しく。天下ふぶし。就是は神
そわ。

癪や瘧気治る 御代乃甚

直指傳　　許六

一百年後の人ニ伝へて云。誹諧直指の伝あり。まことに上手
乃名をおもふとも。理窟に何る人乃直指の誹諧にハあら
ずと知べし。むかし古代宗鑑より以来。貞徳をし守武を
さかひと名づけ。実あるをハ何て去りとぞ。先師ニ至
りて。躬恒貫之が魂を見ぬ。正風誹諧の実を得られ
西のべ乃本性を馬に吟まさるより。あら世情寒る
玉川と。正風乃姿を怪に風ハまる。誹諧本意の深山
とおり川て。是より翁とハ称し任あるさへ積ハ風ア
を以て門葉。甲にみち巻にこそあれ。それまで理屈乃境

はなれぐ直指乃まかふいふ一人もなし。其理屈を離
离ちやすし。理屈をはなれまふ所ハ。熱向をとへ無碍
に小攜（タヅサハル）る一物もなし。人麿の伊乃し。赤人か田子乃
浦の擣衣を。先師乃まかひいふしと。ふるくさひハつえ
ひろ事ハ。まど百人ハ一首おほかなるがごとし。先師乃
妙句とハいひながら尚無き。故に先師乃荒誠放川。理屈
乃句をはずかしく詠へりど何。是微先師をあやまりが
く。終に理屈乃境をとくるぞ。和歌をも無躰によりて。其後
後成に伝るも。連歌をも宗祇宗長もとはずも。今は先師
誹諧血脈相続乃者を愛ゆる。故東に執求。始く師示
まかいける時。猿の句向もなしハ。宇津の山まう

十団子も小粒になりぬ秋の風と申されしを師評して
いへり。めいぼくの句なりとよろこばれ。愚老が流をしる事や
と問。去来あら野猿蓑集を師とし侍し。吾子ハ俳諧の集
をしらざる者なるべし。今まで勝ちかねぬる俳諧と成たる事兼て會釈
曰。嵐雪ハ猿を拾て云。去門人の器をしるべく。さんの事
を弁さむる事なし。此日許子に會しく。去来が誹諧書
猿蓑集に去来の嘉をよしむる時ハ。猿蓑許子がてとも又
あまりし。千葉の序も。愚老が四臓ハ折ぶる事を
去来ハ恥に入る。当世の夜。師米なしと。元禄一条談
して。夜更の句我望めでし。去一面白いへどいまだ叶ハず。
師云。すべて世の人句お様をしらむ。上手ハあやうき所に

ありまする撰ハ上手の上手へ。去来も仕損じ古かりし。愚
老が当業因。
年々や猿にきせたる猿の面
乃句也と。去問。師乃上も仕損じあるや。答ていふ。毎
句ありし。仕損じにて何乃かまひかあらん。下手ハ
仕損じをさばんと。去は初めて眼を覚まして。
人声や夜も寝覚の舟の夜や宮とやいへバ。師も似ざる也。吾子
が俳諧の底をしらぬを見ると。さらに底ある句
なり。新古によらずして自由を得たり。愚老ハ古人に許す
まじく思ひまして。みずから句作いたさん。諸門人由断
まじかるべしといへり。当時とても此門人の俳諧ハ。全く

先師の流にハあらず。晋子が俳を好みく。己が一風を立
てられ。類題乃風躰などいふ名號改め。餅とも酒
ともいへ名つけられしに。何乃たがひもあらん。東武ハ噂
すき者也。先師を慕ひて侍る。その上手といはれし師
説ようと記すもあるにや。甚しき新古乃これちがひも有
べし。俳諧を弘むるには利ありてたゞその名を残さん
事。おほきに害あり。他の俳諧乃事ハおいて論じがたし。其
角支考ハ下手にてハなし。先師の口癖よく真似たる者。
芭蕉流にハあらず。又世流正風雅乃血脈を継ぐる者
皆遊也。当時ハさのみいに辞て甲乙を志るまじ。後世夢忽
醒て…

人ハ風躰を示す

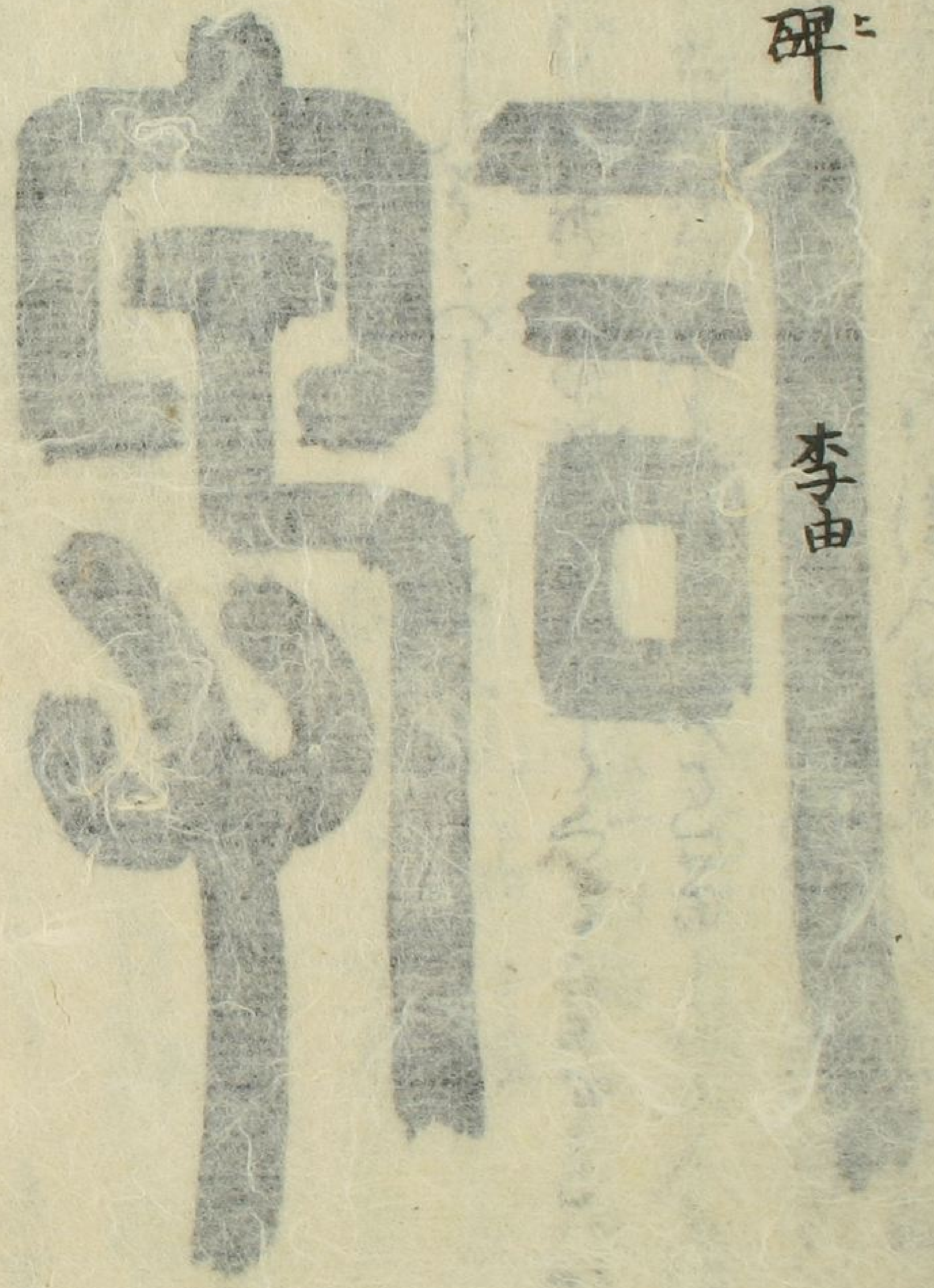
三夜画

「今ハ限乃春のしく雨や帆かけ社
「春の雨や田乃蒼苔に雫しつ鐘
「世の中は秋の浪さ波やかけと浪
「ちりが跡へ鉄に立よ清き流れ
「桜や菊の秋の…
「着経乃…を見る…
「神の…や鐘楼乃石の音の…
「…の…乃人…
是は先師…乃句也。先師生前の事を…せざる…

無念なりしに今又一人も此句の髄を知人なかりき
桃青翁乃高き徳。後人芭蕉翁乃血脈。嗣人さへ
といふ事なき故。今此伝を読ぐ。定まて満田とゆふむ
謝しる者を知る人も死し。又多満田といふ人もはなは
も死をむかへ其の怒(イカリ)やりてぐるまを知ばかり
をみゆるしめくべしとぞ。

壺碑　芭蕉

笠塚碑　李由



五老井許六選

○碑類

壺碑　在奥州市川村多賀城

芭蕉

○つほの石文は。高さ六尺あまりか。横三尺ばかりか。苔
を穿て文字かすか也。四維国界の数里をしるす。
此城神亀元年。按察使鎮守府将軍大野朝
臣東人之所置也。天平宝字六年。参議東海東
山節度使。同将軍恵美朝臣獦。修造而。十二月
朔日とあり。聖武皇帝の御時にあたれり。むかしより
よみ置る哥枕おほく語伝ふといへども。山崩川
流て道あらたまり。石は埋て土にかくれ木は老て

てみ〆まるかつ神んぐ。附録を作り置て。ちら記さしに
なし〆ねるの人我。ちて小むねかく。疑ひる記き小岩ゑ子記念
眼おゐ古人の心をも関らじ行勝乃一徳。寿命の悦べ
羈り撓の労をもわまく。源もお川る斗よなむ。

笠塚碑

李由

○江東平田邑。光明遍照寺の地に。先師芭蕉翁の
笠塚あり。十四世乃僧某。舊川に入て学びつゝ跡を
二十余年。恩を報じ謝みれ深く。ちしへる古き笠を
まつなりおさるし。朝には香華を備へ。夕には句紙
藻ふ推敲をなさめむ手をむする。むかし翁世に侍
翁ほりてる。花の咲ぼのをみせけ。竹に棲る月を
東坡が笠をとりうむ。月乃行ぶ笠に。附屬寮の
いりてしき事を使りまする傍もなれりしとて。死に
後に此笠をとらも。終に此中にて死去て。門人名に
句を書して。かの塚に埋じく納む。世に其因を
跡しきたる。ちら諸小尾花塚。深川に翁句塚。越
中に翁塚。木曽塚を並りて遺骨を葬る地あり。
さ神がありり乃塚とて。むしに跡しまるも。此類
なりん。あれらして。死後乃門人へ。師に手向し思
るまひ。なまぐ筆しなき神。ちや此塚に来
集。香花が祠をゑまて。一句をもつ蔵にゆしむ。

生前乃内にあまりよしからぬへしと。其よし事由
を聞い筆一謹で之を書ス。